

絵雑誌の研究「幼稚園」（小学館）の場合

—戦前・戦中期を中心に

中村悦子

(大妻女子大学)

はじめに（目的及び資料）

今回は幼年絵雑誌の研究にあたり、小学館の「幼稚園」を対象にする。児童雑誌が、幼年向きや男女別に分岐していく中で、本誌が「幼稚園」の名を冠して刊行した意図と実現したものを明らかにし、併せて戦前・戦中の社会・文化状況の変化の中に生きた絵雑誌としての様相を、編集姿勢から捉える事も目的とする。

今回の研究対象の時期は、「幼稚園」創刊の1932年から戦時休刊の1944年を中心にするが、その前史として1925年の集英社創業以降も含む。資料とした雑誌は、「幼稚園」の創刊号から第12巻第1号までの58冊、「ツヨイコヨイコ」の第12巻第2号から第13巻第12号までの23冊、「幼稚園」と同時刊行の「子供園」と「幼年知識」から4冊、及び「幼稚園」創刊以前の集英社刊の「子供絵本」から2冊、「女子絵本」から1冊、「幼女絵本」から2冊、計95冊である。

1. 小学館の創業と学年別雑誌の刊行

小学館は、1922（大正11）年8月、相賀武夫（1931年に祥宏と改名）によって創業される。『小学館五十年史年表』によれば、彼は、出版業の傍ら1920年頃から学年別学習雑誌創刊の構想を練り始め、「日本文化の基礎は小学教育にある。」との信念のもと「教科書学習から趣味娯楽までを統合した全人的学習媒体として『面白くて為になる学習雑誌』」の編集方針をたて、10月には「小学六年生」「小学五年生」（何れも菊判、144頁、35銭）を創刊。1924年4月までには、小学校1年生から6年生までの学習雑誌が揃う。

2. 集英社の創設と雑誌発行

1925（大正14）年7月には、姉妹会社集英社の設立が進められる。早くも「類似雑誌が続出する」状況で、「他社の男女別学年雑誌の創刊に先手を打ってけん制し、「防衛」でもあったと年史は記しているが、就学前向けの雑誌「男子幼稚園」「女子幼稚園」（1926.1）と「男子絵本」「女子絵本」（同7）、「家庭幼稚園」（未見）も創刊された。「幼稚園」の名を付した幼年雑誌としては早く、学年別雑誌に連なって誌名にその名を独占したかに見える。折しも、1926（大正15）年4月には、幼稚園令が制定され、保育項目の再検討など内容の充実と共に「家庭教育ヲ補フ」を目的とする幼稚園は、数的にも増加の時代に入っていた。

1927年創刊のフレーベル館の「観察絵本キンダーブック」は、保育項目「観察」を誌名に副読本を目指して刊行されたことは知られている。

3. 「幼稚園」の刊行—八大学習雑誌の完成

1932（昭和7）年に、「幼稚園」1月号（菊判50頁、特価40銭）と「子供園」1月号（菊判25頁、35銭、集英社の「切り抜き絵本・コードブック」改題合併）が創刊される。この2誌の創刊により、読者層は就学前の幼児から小学校6年生までになり、八大学習雑誌と呼ばれるようになる。またこの年は小学館創業10周年にあたり、新年号全誌に創業10周年八大記念事業が発表され、以後の読者サービスの基盤をつくった。

創刊号「幼稚園」の形態は小学校の学年別雑誌の体裁に似る。表紙には、男女児の笑顔に勉強マーク、モットーや付録が記される。

オ正月タノシミ号、学習指導研究会編輯、タノシイ家庭ノ幼稚園 幼稚園児モハン副読本 学校ニ上ルマデノ指導雑誌、一万人当選大懸賞募集、十周年記念大計画発表、十大付録 (1) 両陛下御尊影 (2) 一寸法師双六 (3) 幼稚園帽 (4) 姫様帽子 (5) ハイカラ眼鏡 (6) 着セカヘ人形 (7) 凧ノ絵 (8) 羽子板絵 (9) 影絵ブック (10) 童謡楽譜。

学習指導研究会の創刊の辞は「(略) 本誌の内容はあくまでも児童の生活を基礎とし、各月多様の季節的材料を集め、事物百般の鑑賞、観察の仕方を教へ、教訓、修身などの徳育的絵物語を載せる一方、幼児の興味と喜びを呼ぶ長編童話、童謡、漫画等を掲げ、為になって面白い幼児雑誌として、小学校へ上がる迄の幼児の唯一の友たらんとする理想の下に編輯しました。」とし、内容に「科学・数の練習・文字の練習・図画・智恵の芽・創造と技能・子供に聞かせる話・対話の稽古・偉人伝や歴史物語・常識の養成・社会知識・漫画とユウモア」をあげる。編集陣に「学習指導研究会 賛助員及執筆諸先生並編輯同人」41名の記載がある。

一方「子供園」は、2年後に「問答式鑑賞観察幼年絵雑誌」を掲げて名も「幼年知識」と改めるように「問答式指導欄」を特色とする雑誌として「幼稚園」との違いを見せている。

懸賞と付録（オマケ）：1920から30年にかけて少年少女誌、婦人雑誌の付録競争が激化し、小学館では

1934 年になると「類似雑誌との競争激化に伴い宣伝活動を強化する為宣伝班を新設」と記されるように、「子供園」と「幼稚園」の懸賞や付録（「オマケ」の用語を使用）も、組立など手工も入れた遊び道具に楽譜、カード、メンタルテスト等の学習物等豊富である。それが1938 年 10 月に内務省警保局図書課から出される「児童読物改善ニ関スル指示要綱」の「禁止すべき事項」にふれて、付録は年一回正月号のみで姿を消して行き、以後の雑誌の雰囲気は大きく変わることになる。

4. 「要綱」の影響

「児童読物改善ニ関スル指示要綱」の発表は、出版界に大きな影響を与える。内容構成では、「母の頁」の強化に現れる。その「編輯上ノ注意事項」に「幼年雑誌及ビ絵本ニ『母ノ頁』ヲ設ケ『読マセ方』『読ンダ後ノ指導法』等ヲ解説スル事」の指示の遵法であろう。1939 年 4 月号（第 9 巻第 1 号）を例に取れば、「特集お母様のページ」は、メンタルテスト、童謡楽譜、お母様方への内容解説、母の講座子供の質問と 10 頁にわたる編輯である。

1939 年 8 月号（第 9 巻第 5 号）から「幼稚園」はその版型を従来の菊判から四六倍判の大型に改める。児童雑誌は菊判が多いが、当時の絵雑誌は「コドモノクニ」や「観察絵本キンダーブック」も大判で絵の質を競っていたことを考えると、遅い転換である。その点で次ぎに述べる単行絵本の刊行は注目される。

版型の変化に併せて「幼稚園」編輯局は、精神的材料、科学的材料、文化的材料と新しい内容区分を示し、幅広い分野を絵画と漫画で表現、加えて雑誌を購入し子どもへ手渡す母親（保育者）を読者対象に幼児向きの雑誌として一つの典型を作ったと考える。続き物や長編を用意し、特に「絵巻物語」欄は見開き絵が 8 枚ある 17 頁仕立の絵物語である。

1940 年末頃からは、「生産童画」「生活童画」「生活練成童画」、42 年度には「科学時局童画」と、時局を意識した区分けが付け加えられるようになる。

5. 小学館の単行絵本の出版について

雑誌を中心に展開してきた小学館であったが、1941（昭和 16）年 7 月より本格絵本「幼児絵本」として、「オダウグ」「オモチャ」「ワタクシ」（何れも B5, 18 頁、35 銭）の 3 点を刊行し、以後絵本出版に参入する。当時「要綱」を受けた児童出版界、特に絵本出版の関係者は、日本児童絵本出版協会を創設（1941 年日本絵本研究會に改組、）して絵本の質的向上に努め、武井武雄を中心に据えた鈴木仁成堂の「幼児標準絵本」、金井信生堂の「幼児国民絵本」など好評を得て、また文部

省の児童図書推薦制度も始まり、単行絵本出版は活気づいていた。月刊絵雑誌と単行絵本と両輪となった。

6. 統合の動き・「ツヨイコヨイコ」へ

1941 年 10 月の情報局通達「学年別、生徒雑誌の廃止とそれに伴う処置」は、小学館の誇る八大学年別学習雑誌を直撃する。1942 年 1 月号で、「コクミン一年生」から「国民六年生」の 6 誌は休刊、2 月号から「小学館ノ少国民雑誌」のもとに、「良い子の友」をはじめに 4 誌に整理される。残る「幼稚園」も同年 5 月号から「ツヨイコヨイコ」に改題され刊行された。

5 月号「ツヨイコヨイコ」（第 12 巻第 2 号）は、「六才から八才（学齡児）迄の御子様方の雑誌」と記され、海ノコドモ（松田富喬・画）を表紙に、山下俊郎が解説「ツヨイコヨイコの母」を書いている。就学前の子どもに残された数少ない絵雑誌として「お子様方へ良書紹介」の欄が設けられ（第 12 巻第 5 号、1942）推薦図書を広く紹介している。

「幼稚園」は、「母の頁」の強化を含み、読者へ向けての発信はあるが、読者からの通信はかつての懸賞以外は極めて少ないのが特徴である。その点、板倉賛治選の絵の募集欄「テンランクワイ」は時代と子ども読者を知る貴重な場である。例えば、優秀賞「クウチュウセン」東京都井田友司君（8 才）（1944 年 2 月号）の「苛烈なる戦闘の感じ」と、同じ号の絵物語「イサマシイ ライゲキタイ」（海軍報道班員東郷博、大本営海軍報道部海軍少佐浜田昇一監修）の構図の類似に、子どもの戦争イメージの形成に絵雑誌の絵の果たした一端を見ることが出来る。

こうした役割を荷うものの児童雑誌への紙の割り当ては厳しくなり、1943 年 2 月号 40 頁、3 月号 34 頁、5 月号 27 頁、1944 年 3 月号（第 13 巻第 12 号）は終に 14 頁（35 銭）で最終号となる。戦後の復刊は、1949 年 1 月号（B5、21 頁、60 円）である。

おわりに：「幼稚園」の歩みが示したこと

小学館の「幼稚園」の歩みは「雑誌とは何か」の追求と実現を目指したものであった。特に幼年雑誌は、絵の多用を特色としながら絵本にはない、絵本ではない絵雑誌として、如何に実現するかを課題とする。「幼稚園」は様々なジャンルを材料とする雑誌形態を追求した道を示している。しかし、この過程に編集者の顔が見えず、「学習指導研究会」という体制が読者に示される。また戦前期の雑誌研究の課題として、戦前から戦後への移行期の解明が残されている。参考・引用文献：小学館社史調査委員会『小学館五十年史年表』1975、及び社史編纂室『集英社 70 年の歴史』1997。